は注目に値するであろう。

つけるのは不自然であること。歌全体の姿から見れば、「幣奉り」「祈ふ」の語が並存している方が、「吾が恋ひす」と続けるより自然であること、などの理由により「贖祈ひ」説に従うものである。解釈としては、

であり、自分が恋しく思うという「吾が恋ひす」にラムを

国々の社の神に幣を奉り、贖物をして私の無事を祈っているであろう妻のいとしいことよ

とする。

鴨長明論

――「方丈記」「無名抄」「発心集」を通して――

二十六回生　松本勝子

目次

序
本論
はじめに（略）
第一章　「方丈記」の意味するもの
第一節　「方丈記」の構成（略）
第二節　「方丈記」の主題
第二章　「無名抄」の意味するもの
第一節　「無名抄」の構成
第二節　「せみのを川事」
第三節　「無名抄」の意味するもの
第三章　「発心集」の意味するもの
第一節　「発心集」の特徴
第二節　「発心集」と長明
結び

序

中世の随筆文学は、「方丈記」と「徒然草」という二つの作品をもってその代表となす。しかし、これら二つの作品は、随筆という共通の形式こそ保っているが、そこには歴然とした違いがある。すなわち、兼好の「徒然草」が明らかに「枕草子」をうけついだ典型的な随筆であるのに対し、長明の「方丈記」は、「巻頭から巻末まで主旨のととのった一篇のエッセイとしての形式に近いもの」[1]なのである。そして、この二つの作品からうかがうことのできる兼好と長明の人物像においても、二人は全く違った性格を呈する。西尾実氏によると、兼好が「あらゆる矛盾を容れ、あらゆる対立を起えた統一と調和を見通すことのできた人間であった」のに対し、長明は「閑居のなかにもちこまれ

ている生活の矛盾と内心の分裂」とを「出家者としての教理によって割りきってしまうことのできない」人間であった。[2]では、長明が兼好ほどの澄んだ境地に達し得なかったのは何故か。持って生まれた性格というものはあるにせよ、それをなおいっそう「捩ぢまげ」[3]たものは果たして何であったのか。そこに、私は人間としての強い興味を覚えるのである。そこで私は、長明晩年の作である「方丈記」「無名抄」「発心集」の三つの作品を通して長明の意図したものをとらえ、長明の心を探り、人間長明というものをうきぼりにしたいと考える。

第一章　「方丈記」の意味するもの

第二節　「方丈記」の主題

閑居生活は、長明にとって「のどけくしておそれなき」ものであった。しかし、そんな閑居生活を、長明は「要なき楽しみ」として否定する。長明をこの心境にまで導き到ったものは何であったのか。

それは死の予感だったのではあるまいか。「一期の月影かたぶきて、余算の山の端に近し。たちまちに、三途の闇にむかはんとす」る自分を意識した長明、死を予感した人間が、それまでおろそかにしていた宗教に対して強い関心を寄せたとしても不思議はあるまい。まして、長明は、出家遁世した聖の身であり、仏道修業は、隠遁生活のたてまえとしても当然なされるはずのものであった。しかし、自分のこれまでの生活をふり返ってみた時、長明は「姿は聖人にて、心は濁りに染めり、栖はすなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつところは、わづかに周梨槃特が行ひだに及ば」ない、はなはだ中途半端な自分に気づくだけである。そこで長明は、何が自分を聖として中途半端な存在にしたのかを考える。

もし、これ、貧賤の報のみづからなやますか、はたまた妄心のいたりて狂せるか。

長明が、河合社禰宜職就任が不成功に終わったことを契機として出家遁世した事は、すでに明らかにされている事実である。それは、はかない都に無常を悟ったというよりも、むしろ失望、絶望といった感情につき動かされたものであって、閑居生活は、都にあって自己の存在を主張できなかった長明が、心の傷をいやし、慰めるために設けた避難所だったのである。そして、閑居の生活を楽しみながら、俗人に対する優越感を味わっていた己の心を解剖すれば、それは、人生の競争に敗北した人間の劣等意識を裏返した姿なのであった。そういった己の聖としての不徹底さを、都の無常なる様を理由に正当化し、容認してきた自分の閑居生活は、全く「要なき楽しみ」であった。

つまり、長明の閑居生活讃美の裏には、絶えず都願望の意識が潜んでおり、それは、不成功に終わってしまった神官としての道に対する捨て切れぬ我執として、長明の心の奥深く巣くっていたのである。それは、もはや実現されるはずもない夢である。しかし、閉ざされた未来が絶望的であればあるだけ、こりかたまった我執は、長明が聖として徹することを阻み続けてきたのではなかったか。

そうして、現在、人生の終焉を迎えんとする長明は、そ

人にて、心は濁りに染めり、栖はすなはち、浄名居士の跡
んな自己矛盾を十分に意識しながらも、我執を絶ち切る術
を知らない。ただ、こんな自分のようなものでも仏はお救
いくださるだろうか、という思いで「不請阿弥陀仏、両三
遍申」すのみであった。
「方丈記」は、このような心境に到達した長明が、過去
をふり返って、聖としての不徹底な自己を発見し、その裏
に己の絶ち難い我執を確認するまでの心の軌跡を記したも
のと考えられるのである。
そうして、確固たる自分というものを、神官としてはも
とより、聖としての存在にも求められなかった長明は、「無
名抄」を著わすことによって、自分の人生の中で自己を主
張し得た唯一の存在である歌人の中に、それを求めようと
するのではあるまいか。

第二章　「無名抄」の意味するもの

第一節　「無名抄」の構成

(1)歌学教科
(i)実作上の注意（作歌の態度・歌会の作法等）　(ii)歌論
（実作上の手引）　(iii)歌評　(iv)故実
(2)趣味談
(v)歌人の旧跡、歌枕、名所　(vi)歌人の伝記、逸話　(vii)事
物の起原
（簗瀬一雄『鴨長明の新研究』より）

第二節　「せみのを川事」

「せみのを川事」は、従来、「無名抄」中最も重要な段
そうして、現在、人生の終焉を迎えんとする長明は、そ
として読まれてきている。それは、この段の最後にある「あ
はれ無益の事かな」という一句のためである。これは「方
丈記」の結末部分に
仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。
今、草庵を愛するも、閑寂に着するも、障りなるべし。
いかが要なき楽しみを述べて、あたら、時を過ぐさむ。
とあるのと共通する心境であり、そこに長明の心情が吐露
されていると考えられるからである。私はここで、その意
味するものを明らかにすることによって、「無名抄」が長
明にとって如何なる意味を持っていたのか考えてみたい。
そこで、まず、「せみのを川事」に登場する祐兼と長明の
かかわりを見ていくことにする。
元暦元年（1184）九月、長明三十歳。長明は賀茂別雷社歌
合に出席し、「石川やせみのを川の清ければ月も流れを尋
ねてぞ澄む」の歌を詠んだが、「かかる川やはある」とい
われて負けと判定された。後に、顕昭法師の再判によって、
「せみのを川」が賀茂川の別名であることが公になり、そ
れ以降、他の歌人の間でもこの歌語が使われるようになる。
この時、祐兼は、
「かやうの事は、いみじからん晴の曾、もしは國王、大
臣の御前などにてこそよまめ。かゝる藝事によみたる。
無念なる事也。」
「さればこそ、それいみじくよみ出したれども、世の末
には、いづれか先なりけん、人はいかでか知らん。何と
なくまぎれてやみぬべかりける。」
と、長明の行為を非難しているのである。

元久元年（1204）春、長明五十歳、出家遁世して大原にこもった。厚因は、河合社禰宜職継承の望みを絶たれたことにあるといわれるが、その望みを絶ったのが祐兼である。当時欠員のできていた河合社の禰宜に、後鳥羽院は長明を任じようと考え、長明もそれを望んでいたらしい。ところが、その時下鴨の惣官であった祐兼が、自分の子祐頼こそ適任であると主張したため、長明は河合社の禰宜となることができなかったのである。

翌元久二年（1205）三月二十六日、「新古今和歌集」が完成し、長明の歌十首が採られる。この十首の中に「石川や」の歌が入っていたことは、長明にとって「生死の餘執ともなるばかり嬉し」いことであった。

以上の事実を念頭におきながら「せみのを川事」を読んでいくと、長明がその最後を「但し、あはれ無益の事かな」と結ばねばならなかった理由が推察されよう。

この部分について、久松潜一氏は、「一方に徹し切れなかった長明の心の動きを見ることができる」[4]と述べておられるが、では、長明の徹し切れなかった「一方」とは何であったのか。それは歌人としての道である。

「新古今集」に歌を採られたということは、歌人としてたいへんな名誉であるに違いない。この事実を素直に歌人として喜べる長明であったならば、それが「無益の事」として意識されようはずはない。しかし、実際長明にはその名誉がむなしいものとして意識されていた。何故ならば、長明の心を「生死の餘執ともなるばかり」の喜びで満たしたのは、十首のうち「此哥の入りて侍る」という事実であったからである。「石川や」の歌を詠んだ長明に対する祐兼の非難のひとつは、「せみのを川」というすぐれた表現も後世には一体だれが最初に詠み出したのかわからなくなってしまうという点にあった。しかし、二十一年経て、かって祐兼に非難されたその歌が「新古今集」に入集されたのである。それは、長明が「せみのを川」と詠んだ最初の人であることを証明し、たとえ「世の末」になろうとも、「何となくまぎれてや」んでしまうような心配を消し去ってしまった。そこには、祐兼に対する、長明のしてやったりという思いがありありとうかがえよう。つまり、長明にとって真に嬉しかったのは、「新古今集」に入選したという事実よりも、その事実によって祐兼の非難に報復できたという思いの方である。そしてそれは、河合社禰宜職継承の望みを絶った祐兼に対する腹いせともなって、いささかなりとも長明の溜飲を下げたのであろう。それ故、長明の喜びは、一徹な歌人としてのものではない。それは、神官としての道に破れた敗北者の屈折した感情として、憂鬱な一面を醸し出す。

そして晩年、その時の喜びを思い返してみた時、その屈折した感情は長明に明確に意識される。歌人としての喜びの裏に、とうてい歌人のものではありえない恨みの一念を見い出すのである。そんな長明には、もはや、歌人としての栄光を素直に喜べるはずもない。「あはれ無益の事かな」この言葉は、そんな我執にとりつかれた自分の愚かさを訴え、歌人として不徹底であった過去の自分を否定するのである。

たのは、十首のうち「此哥の入りて侍る」という事実である。

第三節　「無名抄」の意味するもの

長明は、歌人という立場から「あはれ無益の事かな」という一句を記し、真の歌人となり得なかった過去の自分を否定した。そうすることによって長明の志したものは何であったのか。それは、現在の自分を、真実、歌人として徹底させることだったのではあるまいか。

それを裏づけるものとして、「趣味談」の中に興味深いものがある。それは数寄に関する段である。「無名抄」全七十八段のうち、「趣味談」は三十三段、そのうち数寄に関するものは十六段ある。これは数の上からいっても決して少なくない。そこには、長明の強い関心がうかがえよう。

数寄に関する段は次のとおりである。

ますほと薄事・井手款冬蛙事・關清水事・貫之家事・業平家事・周防内侍家事・あさも川明神事・關明神事・中將垣内事・人丸墓事・猿丸大夫墓事・黒主成神事・喜撰住事・榎葉井事・道因歌に志深事・頼實数寄

これらの諸段のうち十三段は単に歌人の旧跡・歌枕・名所を記したにすぎないけれども、それらは長明が、歌人ならば一度は「必ず尋ねて見るべき」場所として書いたのである。そして当時においては「これら和歌及び歌仙に関係の深い名所に関心を抱くことがとりもなおさず数寄であり、和歌上達の必要条件」[5]であった。つまりは、歌人としての必要条件だったのである。だから、これらの段を多く書いたということは、長明がそれだけ歌人でありたいと願っていたからだと考えられる。長明は、書くことによって自分自身を数寄、すなわち歌人として触発しようとしたのである。

しかしながら、長明の最も強い関心がうかがえるのは、数寄者の逸話を述べた次の三段である。

「ますほの薄事」「道因歌に志深事」「頼實数寄」

この三段に登場する登蓮法師・道因入道・頼実は、いずれ劣らぬ「いみじき数寄者」であった。長明は彼らの姿に何を見ていたのであろうか。

「『好く』ことが歌人たることの必要条件と考えられていた」[6]当時のこととはいっても彼らの有様は、「好く」などという生やさしいものを通り越して、執念とも狂気ともよべるほどのすさまじさである。そしてそれは、神官としての望みを絶たれたにもかかわらずなおもそれに対する執着を捨てきれなかった長明の曖昧さとは似ても似つかない。ただ歌の道に全てをかけた一心不乱な歌人の姿である。そんな彼らの一徹さを自分と比較してみた時、己の不徹底さは「たとしへな」きものとして長明の目に映るのである。そこには、彼らに対する限りない憧憬の念がうかがえる。長明は、数寄者たちの姿を通して、歌人としての己の不徹底さを見つめ、願わくは自己をその境地にまで高めたいと考えていたのではあるまいか。

「無名抄」は、長明以外の人間にとっては明らかに歌学書としての価値を持つ。しかし、長明自身にとっては、真の歌人たろうと試みた自己啓蒙の書として意味を持つのである。

では、真に歌人たろうとした長明の試みは成功したので

あろうか。残念ながら、「無名抄一の中にその徴証を見い出すことはできない。おそらくは、

今より末ざまの人は、たとへ自らことの便り有りてかしこに行き臨みたり共、心留めて聞かんと思へる人も少かるべし。人の数寄と情とは、年月に添へて裏へ行く故なり。

という思いが、長明の心を支配していたのであろう。それ故、数寄者の逸話に触れても、長明の心に、彼らに対するあこがれ以上に積極的な感動が伴わなかったのも当然のこととして推測されるであろう。

ここにおいて、次の「発心集」への移行が必然的となる。

結局、歌人ともなり得ない長明は、その根源である絶ち難い我執を見つめて生きるより他にないからである。

第三章　「発心集」の意味するもの

第一節　「発心集」の特徴

「発心集」は、十段内至十五段を一巻とする八巻構成となっており、全百二段より成る。しかし、これらは雑然と羅列されており、長明の意図的な構成がなされたものではないと考えられる。そこで私は、(1)遁世について(2)諸行について(3)執についてという三つの基準を設けて「発心集」を考えていくことにした。

(1)遁世について

遁世のあり方	説話	長明の主張・考え
隠徳	一の一「玄敏僧都、遁世逐電の事」 一の二「同人、伊賀の国郡司に仕はれ給ふ事」 一の三「平等供奉、山を離れて異州に趣く事」 一の五「多武峯僧賀上人、遁世往生の事」 一の十「天王寺聖、隠徳の事付乞食聖の事」	「古郷に住み、知れる人にまじりては、いかでか、一念の妄心おこさざらむ」 「境界を離れんよりほかには、いかにしてか、乱れやすき心をしづめむ」
(隠徳の行為が更に一歩進んで、徳を隠すために)過をあらはす	一の十一「高野の辺の上人、偽って妻女を儲くる事」 一の十二「美作守顕能家に入り来る僧の事」	「『出世の名聞は、譬へば、血を似て血を洗ふが如し』……本の血は洗はれて、落ちやもすらん、知らず。今の血は、大きにけがす。愚かなるに非ずや。」

これらの聖たちに共通していたのは、市井にあって見事　惜しまれ　その根は地下　一山根に　[illegible]

これらの聖たちに共通していたのは、市井にあって見事自分の徳を隠し「一念の妄心」を起こすこともなく往生を遂げたということである。そういった往生人たちに対して長明は「勝れたる後世者の一の有様なり」と最大の讃辞を惜しまない。それに比べ、「山林に交はり、跡をくらうする」行為を「人の中に有って徳をえ隠さぬ人のふるまひ」だとしてしりぞける。長明にとって遁世者の理想は、「大隠、朝市にあ」るべきなのであった。

(2)諸行について

行の種類	説話	長明の主張・考え
捨身の行	三の七「書写山客僧、断首往生の事、此の如き行を謗るべからざる事」	
	二の九「助重、一声念仏に依って往生の事」 二の十「橘大夫、発願往生の事」 三の一「江州増叟の事」 三の三「伊予入道、往生の事」 三の四「讃州源大夫、俄に発心、往生の事」 七の三「中将雅道、法華経を持ち、往生の事」 七の四「賀茂女、常住仏性の四字を持ち、往生の事」 七の五「太子の御墓、覚能上人、菅絃を好む事」	「疑ひて何の益かはある。しかるを、我が心の及ばぬままに、みづから信ぜぬのみならず、他の信心をさへ乱るは、愚癡の極まれるなり」 「勤むる処は少なけれども、常に無常を思ひて、往生を心にかけむ事、要が中の要なり」 「必ずしも浄土の荘厳を観ぜねども、物にふれて理を思ひけるも、又、往生の業となんなりにけり」 「功つめる事なけれども、一筋に憑み奉る心深ければ、往生する事またかくのごとし」
たいした功徳も行も勤めなかった。		
数寄の道（菅和歌絃）	六の七「永秀法師、数寄の事」 六の八「時光・茂光・数寄天聴に及ぶ事」 六の九「宝日上人、和歌を詠して行とする事、并蓮如、讃州崇徳院の御所に参る事」	「数寄と云ふは、人の交はりを好まず、身のしづめるをも愁へず。花の咲き散るをあはれみ、月の出入を思ふに付けて、常に心を澄まして、世の濁りにしまぬを事とすれば、おのづから生滅のことわりも顕はれ、名利の余執つきぬべし。これ、出離解脱の門出に侍るべし」

以上のごとく、長明はいずれの行をも否定するということをしない。たとえそれが行とよぶにはあまりに些細な行ないであっても、それがその人の真心からの発露によるものであるならば、どうして往生の因とならないことがあろう。そのことを長明はくり返し書き連ねるのである。そうした長明の、行に対する考えは、次の言葉に言い尽くされていよう。

諸行は、宿執によりて進む。みづからつとめて、執して、他の行そしるべからず。一華一香、一文一句、皆西方に廻向せば、同じく往生の業となるべし。水は溝をたづねて流る。さらに、草の露、木の汁を嫌ふ事なし。善は心にしたがひておもむく、いづれの行か、広大の願海に入らざんや。（第六の十三）

長明の肯定し、尊重する諸行は、必ずこの「心にしたがう」という自然な意志の発露によって裏づけられねばならないのである。

(3)執について

執に関して	説話	長明の主張・考え
執を克服した話	一の七「小田原教懐上人、水瓶を打ち破る事は陽範阿闍梨、梅木を切る事」 一の九「神楽岡清水谷仏種房の事」	「実に仮の家にふけりて、長き闇に迷ふ事、誰かは愚かなりと思はざるべき。然れども、世々生々に、煩悩のつぶね、やつことなりける習ひの悲しさは知りながら、我も人も、え思ひ捨てぬなるべし」
執を絶ち切れず悪身を受けた話	一の八「佐国、華を愛し、蝶となる事付六波羅寺幸仙、橘木を愛する事」 二の八「真浄房、暫く天狗になる事」 三の八「蓮花城、入水の事」 五の三「母、女を妬み、手の指蛇になる事」 八の二「或る上人、名聞の為に堂を建て、天狗になる事」 八の八「老尼、死の後、橘の虫となる事」 八の九「四条の宮の半者、人を咒詛して乞食となる事」	「すべて、念々の妄執、一々に悪身を受くる事は、はたして疑ひなし。実に、恐れても恐るべき事なり」
老いてなお望み深い老人の話	三の十「証空律師、希望深き事」 五の十二「乞食、物語の事」	「かの無智の翁が独覚のさとりを得たりけんには、たとへもなくこそ」 「罪ふかくあはれにこそ侍れ」

このように、長明は執にこだわる人間の愚かさを説きなにおいて歌人としての徹底を試みるが失敗に終わってしま

このように、長明は執にこだわる人間の愚かさを説きながらも、彼の心は執にとらわれ悶々として生き、ついには往生を断念せねばならなかった愚かな「凡夫」の姿を見つめているのである。それは、彼らの行為が、神官として失敗しながらなおもあきらめきれず今日まで生きてきた自らの体験とあいまって、彼らの中に自分の影を見い出し、共感を覚えるのを禁じ得なかったのであろう。

第二節　「発心集」と長明

「遁世について」「諸行について」「執について」この三つの項目の関連について考えてみると、これらは隠遁して後の長明の人生とよく符号する。

長明は方丈の庵をかまえ、閑居生活に明け暮れるのであるが、彼の遁世は「山林に交はり、跡をくらうする」行為そのものであった。この事実を、遁世についての長明の理想――大隠は、朝市にあり――と比較してみると、「人の中に有って徳をえ隠さぬ人」の中に長明自身も当然含まれるわけである。すなわち、遁世に対する長明の理想は、彼自身によっては実現されていなかったのである。このような長明にとって、理想はあくまで理想でしかなかったのであろう。

一方、閑居生活は「もし、念仏ものうく、読経まめならぬ時は、みづから休み、みづからおこたる」という気ままなものであった。しかし晩年に到って長明は、そのような隠遁生活に疑問を覚え、仏道修業においてはなはだ中途半端であった自分を認めざるを得ない。そうして、「無名抄」において歌人としての徹底を試みるが失敗に終わってしまう。ここにいるのは、そのように何事においても不徹底で中途半端であった長明である。諸々の行によって往生する人間たちを説話の中に見、往生が行の如何によるのではなく、如何なる行であれ、自分の信じたことをただひたすら行ない勤めたその結果であることを知った長明にとって、遁世から現在に到るまでの自分の生き方は彼らのそれと比べようもない。

結局、長明の理想とする遁世者たちにも、また、諸行によって往生を遂げた人間たちにも、長明は、自分とは全く違った生き様を見せつけられ、彼らとの限りない隔たりを思い知るのである。

そんな長明が深い共感をもって書きとめた話があった。それが執にまつわる説話である。しかもそれは、執を絶ち切って往生を遂げた人の話ではなく、執を絶ち切れずに苦界へと陥った人々の話であった。それが物に対する愛着であれ、名聞に対する執着であれ、あるいは人に対する恨みであれ、それらは、長明が現在まで抱きつづけてきた、神官として不成功に終わったことに対する恨みと同質の要素を持った、愚かしい人間の執であった。

つまり、長明は「発心集」において、自己の絶ち難い執を見つめていたのである。もちろん、それは意図的になされたのではなく、長明が数多くの説話にふれるうち、自分の体験と結びついた、そして現在の自分と何らかの形で共通するある種の説話へ自然と傾いていったのだと考えられるのである。そうしてでき上がったものは、長明の意図し

ないにもかかわらず、長明の人生と強烈に結び合う。遁世→閑居の生活→「方丈記」の執筆→「無名抄」の執筆、これらを経て長明に残ったものは、実現されるはずもない神官としての道に対するやむにやまれぬ我執であった。その我執を絶ち切れないまま「発心集」を書き進めていったのであろう長明の心は、おのずから説話の中に息づく諸々の執へと傾斜する。そして書き終えた「発心集」を読み返すたびに、長明は己の執と直面し、それを見据えて生きていかねばならなかったのであろう。

結び

「方丈記」「無名抄」「発心集」に共通するのは、絶ち難い長明の「執」である。そして、その「執」とは、長明が成り得なかった神官という地位に対する執着であり、同時に長明の神官としての望みを絶った祐兼に対する恨みでもあった。

そういった「執」は、長明の中で微妙な変化を遂げていく。すなわち、「方丈記」において、自分の中に「執」を認めた長明は、「無名抄」において、歌人として徹底することによって「執」を絶ち切ろうと試みる。しかし、あくまで己の「執」が絶ち切ることのできないものであることを知った長明は、「発心集」において、己の「執」を直視するのである。つまり、「方丈記」→「無名抄」→「発心集」と書き進められる中で、長明の「執」は決して消えさることはない。それどころか、それはますます明確に長明に意識されてくる。そして、「発心集」を書き終えた時から、長明は己の絶ち難い「執」を凝視しつつ生きていかねばならないのである。そこには、これから先、自分には決して心の平安はもたらされないであろうという、暗い、しかし、確実な予感がある。

結局、長明は煩悩のとりことして、悶々として生きていったのであろう。それは、まさに、あくまで「凡夫」としての救いのない身を生きた共感すべきひとりの人間の姿なのである。

〈注〉

(1)「中世随筆・日記文学の展望」永積安明（『中世文学の展望』東京大学出版会）
(2)日本古典文学体系『方丈記・徒然草』解説　西尾　實（岩波書店）
(3)「方丈記」風巻景次郎（『日本文学史中世』至文堂）
(4)(5)(6)「無名抄」久松潜一校注（日本古典文学体系『歌論集　能楽論集』岩波書店）(4)補注二六　(5)補注六七　(6)頭注一九（P48）

参考文献（略）